

BroadWorks 22.0からのアップグレードのガイド

内容

はじめに

このドキュメントでは、BroadWorks 22.0のソースリリースからのアップグレードを計画する際に役立つ考慮事項と要件について説明します。

概要

BroadWorksリリース22.0は、リリース23.0および24.0へのアップグレードをサポートしています。リリース[22.0はメンテナンス終了\(EoM\)](#)、[23.0は2024年7月末](#)、24.0は2026年7月末に予定されています。24.0へのアップグレードが推奨パスです。

リリース独立型バージョン

リリース23.0以降のMSはリリース非依存(RI)であり、24.0ではASリリース非依存を除くすべてのサーバがリリース非依存です。すべての新機能、バグ、およびセキュリティ修正は、新しいバージョンで提供されます。パッチは利用できません。修正を入手するには、サーバを別のバージョンにアップグレードする必要があります。緊急の修正が必要な場合は、毎月のパッチバンドルの代わりに各サーバの新しいバージョンがリリースされるか、より頻繁にリリースされます。

RIバージョンは、標準のRel_24.0_1.944形式とは異なる形式を使用します。このRI形式はServer_Rel_yyyy.mm_x.xxxです。

- サーバはMSです。次に例を示します。
- yyyyは4桁の年です。
- mmは2桁の月です。
- x.xxxはその月の増分リリースです

MS_Rel_2022.11_1.273.Linux-x86_64.binは、2022年11月にリリースされたMSのバージョンです。特定のサーバタイプや増分バージョンを指さない場合、これは2022.11に短縮されることがよくあります。

オペレーティングシステムの要件

ソースのオペレーティングシステム(OS)がターゲットリリースでサポートされていることを確認します。

サポートされているオペレーティングシステムは、Red Hat Enterprise Linux、Oracle Linux、お

およびCentOS 7です。[CentOS 8](#)、CentOS Stream、Rocky Linux、およびAlma Linuxはサポートされていません。

[Linux 6のサポートは2023年4月30日に2023.05で終了しました。](#)

[Linux 7のサポートは2024年6月20日に2024.07で終了します。](#)

Linux 9のサポートは2023.09以降で利用可能です。

メジャーリリース対応Linuxバージョン

R22:5.9以上、6.5以上、7

R23:5.9以降、6.5以降、7および8.x(ap385046が必要)

R24:6.5以降、7、8

リリースに依存しないサポート対象Linuxバージョン

2018.01以降 : 5.9以降、6.5以降、7

2019.10以降 : 6.5以降、7

2020.07以降 : 6.5以降、7、8

2023.05以降 : 7、8

2023.09以降 : 7、8、9

データベースサーバ(DBS)でサポートされるLinuxバージョン

DBS R22:5.9以上、6.5以上

DBS 2018.11 ~ 2020.08:6.5以上、7

DBS 2020.11 ~ 2022.06:7.5+のみ

DBS 2022.07+:7.5以上、8.5以上

OSのアップグレード

BroadWorksは、主要なLinuxバージョン間のインプレースアップグレードをサポートしていません。ハードウェア交換を実行し、ターゲットのLinuxバージョンに新しいサーバを構築し、既存のサーバを新しいサーバに移行することを推奨します。『[ソフトウェア管理ガイド](#)』のセクション5.2.6と『[メンテナンスガイド](#)』のセクション12.2を参照してください。

ハードウェア交換を使用してBroadWorksを同時にアップグレードしたり、ハードウェア交換とBroadWorksのアップグレードを同じメンテナンスウィンドウで実行したりすることは推奨されません。データベースを持つサーバは、アップグレードプロセスを経る必要があります。あるバージョンのBroadWorksのデータベースを別のバージョンのBroadWorksにインポートすることはできません。

アップグレードの制限とサーバ固有の注意事項

Profile Serverと拡張サービスプラットフォームのアプリケーション配信プラットフォームへのアップグレード

リリース24.0以降、プロファイルサーバ(PS)と拡張サービスプラットフォーム(XSP)は同じサーバタイプになり、アプリケーション配信プラットフォーム(ADP)と呼ばれます。PSサーバとXSPサーバはアップグレードが完了し、アップグレード後にADPサーバタイプになります。

ADPライセンスと、導入されたアプリケーションの更新バージョンが必要です。XSPのアップグレードは、アプリケーションサーバ(AS)のアップグレード後に行う必要があります。ダウンロードポータルにはPSおよびXSPのRIバージョンがありますが、これらはASの代わりに実行サーバ(XS)サーバを導入するシステム専用です。ASが設定されているすべてのシステムで、PSとXSPをADPにアップグレードする必要があります。

Cisco BroadWorksアプリケーションおよびWebアプリケーションは、XSP、PS、およびADPで手動でアップグレードする必要があります。

データベースサーバ

データベースサーバ(DBS)は、OSの制約により、最新のRIリリースにアップグレードするために何度もアップグレードする必要があります。DBS 22.0はLinux 5および6をサポートします。Linux 5を実行している場合、DBSは22.0を超えてアップグレードできません。DBSのリリース独立型ビルドはLinux 5をサポートしていません。Linux 6を実行している場合、DBSは2020.08にアップグレードできます。その後、DBSは再びアップグレード可能なLinux 7にハードウェアをスワップする必要があります。DBSおよびPSをアップグレードする場合は、DBManagementおよびDBSObserverのバージョンがDBSのバージョンと一致する必要があります。これにより、基礎となるOracleのバージョンが互換性を確保できます。

DBSリリースとOracleリリースの連携

22.0:Oracle 11

2018.11 ~ 2020.08:Oracle 12

2020.11以降 : Oracle 19

DBSアップグレードのスキップ

DBSのアップグレードをスキップして、22.0からDBS 2022.03+に直接DBをインポートするオプションがあります。ただし、このプロセスは迅速ではなく、実稼働に必要なタイミングを確認するためにラボでテストする必要があります。「[DBSリリースノート](#)」セクション6、BWKS-3069、および「[DBS設定ガイド](#)」セクション6.5.7.3を参照してください。

拡張コールログ

Enhanced Call Logs(ECL)は、DBS 2020.08以降のDBSでのサポートが終了しています。ECLデータベースを継続的に使用するには、ネットワークデータベースサーバ(NDS)に移行する必要があります。移行は自動的に行われません。詳細については、『[拡張コールログソリューションガイド](#)』および『[NDS拡張コールログ機能の説明](#)』を参照してください。移行手順については、『[ネットワークデータベースサーバ設定ガイド](#)』および『[DBSからNDSへのECL移行の機能説明](#)』

を参照してください。アップグレードの前に移行を実行する必要があります。

Collaborateサーバ

Messaging Server(UMS)、Sharing Server(USS)、Video Server(UVS)、WebRTC Server(WRS)、Business Communicator Client(BTBC)、およびConnect Clientのメンテナンス終了(EoM)は、2022年1月31日です。UMSで使用可能な最新のRIバージョンは22.0で、USS、UV、およびWRSで使用可能な最新バージョンは2022.01です。

24.0のASは、22.0および21.sp1のUMSと互換性があります。UMSを22.0にアップグレードすることは推奨されません。22.0のUMSは、アップグレードに追加の手順を必要とするOracle TimesTenの代わりにMariaDBを使用し、別のMethod of Procedure(MOP)を使用し、冗長性のために追加のノードを必要とします。『[UMSアップグレードMOP](#)』および『[MariaDB 10.1サポート終了に関するフィールド通知](#)』を参照してください。

CollaborateサービスをWebEx for BroadWorksに置き換えることをお勧めします。『[WebEx for BroadWorksソリューションガイド](#)』を参照してください。

要素管理システムおよび仮想ライセンスサーバ

Element Management System(EMS)とVirtual Licensing Server(VLS)は2018年第2四半期時点でサポート終了(EoL)となっており、その機能はNetwork Function Manager(NFM)に置き換えられています。NFMへのアップグレードパスや、EMSまたはVLSノードの使用停止はありません。

ネットワーク機能マネージャ

ネットワークモニタリングを導入する場合は、2020.11に22.0をアップグレードしてから2022.08以降にアップグレードするという、追加のステップが必要です。

ドキュメントのレビュー

ターゲットリリースのリリースノート、およびターゲットリリースとソースリリースの間のすべてのリリースを確認する必要があります。ターゲットリリースが24.0の場合は、22.0、23.0、および24.0のリリースノートを確認する必要があります。

[23.0リリースノート](#)

[24.0リリースノート](#)
[アップグレード手順](#)

正式にサポートされているアップグレードパスについては、『[ソフトウェア互換性マトリクス](#)』を参照してください。

ライセンス要件

ターゲットリリースには新しいライセンスが必要です。 [ライセンスを要求するには、チケットを](#)

[開きます](#)。24.0へのアップグレードの場合は、PSおよびXSPライセンスをADPライセンスに変換するように要求します。ADPはPSまたはXSPライセンスを受け入れません。

メジャーリリースに対するRIの調整

2018.xx = R22

2019.01 ~ 2020.06 = R23

2020.07 ~ 2022.07 = R24

ベスト プラクティス

サポートのリクエスト

BroadWorks Upgrade Teamから直接アップグレードサポートを利用できます。

BroadWorksアップグレードチームは、メンテナンスおよびサポート契約に基づいて、ラボおよび実稼働用の最新の「サポート中」リリースへのアップグレードを年1回提供します。アップグレードチームは、アップグレードの準備に関するサポートと、アップグレード中のリアルタイムのサポートを提供できます。サポートには、アップグレードをリモートで実行するシスコのエンジニアが含まれます。アップグレードチームの範囲はアップグレード作業のみに限定され、ハードウェアやオペレーティングシステムの更新、既存の問題のデバッグなど、アップグレード前に解決する必要がある問題の直接サポートは提供しません。また、一般的なサーバのヘルスチェックを超える包括的なアップグレード後テストも提供しません。

BroadWorksアップグレードチームに連絡するか、アカウントチームを通じて、または bwupgrade@cisco.com に電子メールを送信してください。リアルタイムアップグレードサポートは、事前にスケジュールを設定しておくため、急な連絡では利用できません。

アップグレード前のBroadWorksサポートへの通知

アップグレードチームのサポートなしでアップグレードを実行する場合は、BroadWorksサポートに数日前に重大度4(s4)チケットを通知することをお勧めします。メンテナンス中に問題が発生した場合は、チケットの重大度をs1に上げ、新しいs1チケットを開くか、[サポート回線に電話して](#)エンジニアに話しかけます。

テスト計画

アップグレードを円滑に行うには、テスト計画が不可欠です。テスト計画は、実稼働アップグレードの前にラボで開発およびテストする必要があります。アップグレード前にシステムでテスト計画を実行し、結果を記録します。これにより、システムの健全性が確保され、すべてのテストユーザとアカウントが正しく設定されて機能していることが検証されます。また、テスト計画に

潜在的なギャップを見つける機会が提供され、テストにかかる時間の見積もりが提供されます。

アップグレードが完了した各サーバをテストして、正常に機能していることを確認してから、次のサーバにアップグレードする必要があります。

パッチ適用

アップグレードの前に、ソースリリースに最新のパッチレベルの6か月以内のパッチを適用します。

インストール前のチェックスクリプト

アップグレードの前に対処する各サーバ、ラボ、および実稼働環境で、インストール前のチェックスクリプトを実行する必要があります。

ラボでのアップグレード

本稼働環境を複製するラボ環境で、サードパーティ製のツール、アプリケーション、またはクライアントを使用して、アップグレード、テスト計画、およびターゲットリリースをテストすることが常に推奨されます。ラボはスケールダウンできますが、同じサーバタイプ、ソフトウェアバージョン、OSバージョン、アクセスデバイス、セッションボーダーコントロール(SBC)などが必要です。ラボ環境のアップグレードは、実稼働環境のアップグレードに対するドライランとして扱います。ラボをアップグレードするときは、最新のターゲットリリースのパッチレベルを使用します。ラボと実稼働のアップグレードの間の時間を3か月以内に保ちます。

スケジューリングとアップグレードの順序

アップグレードは、数日間に渡って複数のメンテナンス時間帯に行うことが想定されており、[ソフトウェア管理ガイド](#)のセクション4.2に記載されているように、インストールとアップグレードの順序で実行されます。アップグレードは、事前に決められたメンテナンス時間帯（混雑していない時間帯）に必ず実行してください。常に一度に1つのノードをアップグレードし、クラスターの1つ以上のノードが常にダウンしていることを確認してください。メンテナンスウィンドウ(MW)の長さ、アップグレードするサーバの数、サーバタイプ、およびテストの予想所要時間によって、必要なメンテナンスウィンドウの数が決まります。クラスター内のすべてのサーバは、同じMWでアップグレードする必要があります。必要に応じて、トラブルシューティングやロールバックのためにスケジュールされたMWで利用可能な時間を残します。

アップグレードの失敗

アップグレード後のテスト中に問題が検出された場合、またはアップグレードが失敗した場合は、ログを収集してから、ソースリリースに戻るか、サーバを復元してください。ログディレクトリ全体をバックアップして、有用な可能性のあるすべてのログが確実に保持されるようにします。すぐにチケットを開き、MWにいる間にサポートに連絡して支援を求めてください。

翻訳について

シスコは世界中のユーザにそれぞれの言語でサポート コンテンツを提供するために、機械と人による翻訳を組み合わせて、本ドキュメントを翻訳しています。ただし、最高度の機械翻訳であっても、専門家による翻訳のような正確性は確保されません。シスコは、これら翻訳の正確性について法的責任を負いません。原典である英語版（リンクからアクセス可能）もあわせて参照することを推奨します。